『グローカル天理』第６号（通巻 30 号）掲載論文要旨

井上昭夫　「巻頭言　環境と文明の変遷に見る「元の理」解釈」

天理教の創造救済説話である「元の理」は「５尺になった時、海山も天地も世界も皆出来て、人間は陸上の生活をするようになった」と人間と自然の共進化を示 唆している。つまり天理教では人間生存にふさわしい自然の条件がととのって人間が誕生したとは教えていない。このことは環境問題を考えるについて天理教者 が見逃してはならない大切なポイントである。今回は最近の比較文明論の視点から考えてみたい。

荒川善廣　「「元の理」の探究（15）―人間と存在［６］」

教祖は、地上に顕現した親神の姿を表しているだけでなく、人々に親神信仰のひながたを示されたとみなされる。すなわち親神の「やしろ」たる教祖と、ひなが たの親たる教祖は、同一人格である。さらに、「やしろ」とは、端的に言って、教祖の魂を指すが、この魂はいざなみのみことのいんねんであったので、教祖の 魂は、「やしろ」に定まる以前から、すでに永遠の次元において、いざなみのみことしての働きをされていたのである。親神は、この魂を用いて「はらむ」と いう働きを見いだされ、また、人間界において実現されるべき無限の可能性（potentialities）をこの魂においてはらんでいるのである。

宮田元　「宗教・スポーツ・教育（10）―宗教とスポーツ［８］」

相撲は、深く儀礼と結びついている。宗教的な儀礼と密接なかかわりをもつ神事相撲については、今も各地で広く行われているのを見ることができる。相撲は，　伝承によると，神と精霊の争いを表象したもので、威力ある神がその土地の精霊を征服する形をとったといわれる。神事相撲として、人間が田の精霊と取る独り 相撲があり、人間が負けることによって、田の精霊を喜ばせ、稲の豊穣が約束される。また地鎮めの儀式とされているのが、横綱の土俵入りである。しこを踏む とは、本来、邪霊、悪霊を踏みつけるという地鎮め神事を意味する。スポーツとしての相撲に、古来の信仰にまつわる伝統が生かされているとみることができよ う。

末延岑生　「ことばと教育（15）―ことばの元を探る［15］」

人類のほとんどは、生まれてきたときからことばになじみ、ことばの専門家から教えられるわけでもなく、ほとんど誰もが母語を失敗なく習得することができる というのに、われわれ外国語の教師の多くが、ことばを教えることによって、かえってせっかくこうしたことばを使え

るという子供たちの天賦の才能の芽を切り 取り、小さいときから苦しめて、使えなくしているとすればどうだろうか。上述の統計の続きを見よう。日本の学生の学校生活に対する不満度は、２位のフラン スの２９％、３位のスイスの２５．３％を大きく差をつけて４５．５％と、抜きん出て世界最高である。私の中･高･大学の４０年にわたる言語教育の経験から、その原因の大半は明治以来 100 年にわたる英語教育の欠陥だと断言できる。

その意味でこの日本の英語教 育文化は未開の国々の女性に対して施行される現代にも繋がる忌むべき呪縛ともいえる“割礼文化”に通じるものがある。これこそ神が人間に貸し与えたことば の存在とそれが使えることの喜びに対する感謝どころか、こうしたことばの恩物に対する裏切り、すなわち、八つのほこりのうちの「うらみ」「はらだち」の世 界に他ならないのではないか。本来“陽気ぐらし”のためにと授かったはずのことばの使用が、逆に人々を苦しめる材料に成り果てた姿である。このことについ てのさらに詳しい検討は稿を改めるが、長年にわたって日本中にこのような英語嫌いをつくってきながら、そうした子供たちの苦しみ、痛みに気付かない、それ が科学的に証明できない限り、一向に気付こうとしないのが私達英語教師である。

小滝　透「天理比較神秘論への試み（30）―宗教と世俗［２］」

個人救済論と集団救済論の特徴を幾つかの例を挙げて述べてみた。個人と社会は共に関係し合って存在する故、いかなる宗教もその双方を内に秘めているのであるが、いずれかの傾向を色濃く持つのもこれまた確かなことである。今回は、それについて比較検討してみた次第である。

小林正佳　「芸術・癒し・宗教（30）―繋がりの中での自己肯定」

踊り手と囃し手の中にある動きの音循環が重なり合い、相互に相手の循環に乗り入れることが可能になる。そうした共感を、踊りの中でしばしば実感する。しか もそれは、単に踊る営みがもたらす結果としてではなく、民俗舞踊を踊る仕組みそのものの中に組み込まれている。自分の生活の中で、これほど見事にほかの誰 かとの相互関係の中に入り込み、互いの経験を即座に受けとめながら生きていることを強く感じた場面があるだろうか。

そんな体験が、おそらくどん な人間にも必要だし可能であるに違いない。にもかかわらず、心の病とは、多くの場合、世界と自分とのあいだにそうした人間の絆を実感できなかったことと ど こかで結びついていた。とするなら、踊ることを通して、改めてこうした共感や共鳴を体験することが可能にならないだろうか。

人と人との絆の中にある自己を見い出すだけではない。さらに、それを受けとめ、引き受け

てゆく。わたしはそれを、民俗舞踊によってもたらされる繋がりの中での自己肯定と理解したい。

堀内みどり　「天理異文化伝道（28）天理教のコンゴ伝道［27］―ノソンガ会長就任〈1971－1989〉［１］」

高井は、再びコンゴに赴任し、コンゴブラザビル教会の３代会長に就任した。しかし、その就 任奉告祭にノソンガは出席しなかった。おぢばに滞在したままだったからである。この出来事は、高井とノソンガの思いの違いを象徴する出来事となり、以後も 高井や日本人とノソンガとの間での問題が何度も生じた。高井は、会長就任に当たり、役員会を開催し、布教の基本方針を話し合った。ノソンガを４代会長に就 任させることを第一の目標としたが、当面は神殿当番をもうけるなどして、現地ようぼくが中心となって、教会活動ができるように勤めることになった。

上杉武夫「都市の再生に向けて―アメリカ通信［22］東アジアの庭園［３］

日本庭園 が外国人の目と心を打つのは、きっとそのきめ細やかさにあるだろうが、それは日本庭園だけとは限らない。中国や韓国の庭園にも共通してみられる詩や歌、そ して風景画との強い結びつきは、多くの場合、庭園の特殊性、つまり総合美をつくりだした。有名な詩人の王維の庭や、八条宮智仁親王の桂離宮などを流れる詩 的世界こそ、庭園美の根幹をつくりだしているものなのである。ここでは日本庭園を代表する桂離宮の庭にも匹敵する庭として、金閣寺の庭園についても論考を 加える。

特別掲載：第二回天理・スポーツギャラリー展関連シンポジウム 2002（１）橋本武人「開会の挨拶」

本稿は第２回天理スポーツ・ギャラリー展関連シンポジウム 2002 「天理ラグビーの真髄と人材育成」における開会の辞の内容を解いたものである。 ここでは、「スポーツと教育」「スポーツと宗教の関係」等のトピックに簡潔にふれながら、本シンポジウム開催の意義や趣旨を唱えてみた。また開会の辞の最 後には、「いかにお道の教理とスポーツの関わりを理論付けるのか」という将来において生じるであろう学術的課題について提起し挨拶とした。

特別掲載：第二回天理・スポーツギャラリー展関連シンポジウム２００２（２）
土佐敏太郎「二代真柱様と天理ラグビー」

本稿はシンポジウム「天理ラグビーの真髄と人材育成」における土佐敏太郎講師の講演録である。天理ラグビーの歴史は大正 14 年、中山正善天理教二代真柱により、天理中学校（現天理中学校、天理高校）、天理外国語学校（現天理大学）にラグビー部を創設したことに始まる点について は多くの人の知る所である。講演は天理ラグビーの萌芽・草創期から現在までの動向を、主に二代真柱との関連からつづられた。

講演の前半では、天理ラグビー誕生から戦前までの活動の動向を中心にふれられ、その中で、二代真柱が学校にラグビーを取り入れらた経緯や草創期における部活動の実態、また昭和 11 年に天理高校が全国制覇を成し遂げた際のエピソード等について語られた。後半では戦後の復興期における二代真柱の教内外に対する数々の親心について、さら に現在の天理ラグビーやその周辺に与えている影響について言及された。そして、最後は講師の二代真柱への感謝の気持ちでしめくくられた。